

## 巻 頭 言

# 学会専門医制度のインパクトと精神神経学会の使命

前田 潔 日本精神神経学会理事  
Kiyoshi Maeda

第105回精神神経学会総会が間もなく開催されます。5月開催予定が神戸での新型インフルエンザ感染拡大があり、延期になったものです。会員の先生方には大変ご迷惑をおかけしました。申し訳ありませんでした。今回は無事に開催されることを心から願っています。

本学会の大会長を引き受けるようにと当時の小島理事長から要請があったのは2007年の4月ごろであったろうか。長く関西で総会が開催されていなかったこと、たまたま私が理事であったことなどから私に声がかかったものと理解した。当時、本学会の大会長を引き受けることは必ずしも名誉なことではなく、その大変さを考えるとお断りするという選択肢もあった。現に引き受けたくないという方は当時たくさんおられたと思う。私は理事も2期目に入っていたし、年齢などから大会長の順番がきたのかなとも考えた。それまでの2・3年の大会長をみても、皆、穏やかな、多くの会員から受け入れられていると思われる方々であった。大会長の決定はそういう微妙なところのある事柄であると理解されていたように思う。その線上で私に声がかかったのであれば悪い気はしなかった。そんなことなどを判断してお引き受けすることとした。2007年の高知大会の総会で2009年の大会長が私と決定された後、会場で「よく引き受けたね」と嫌味とも感心ともとれる言葉を投げかけられたことを覚えている。

2006年の福岡での大会は参加者がそれまでと変わらない2000人程度であったように記憶している。2007年の高知での大会も地域の関係から参加者が2000人余で、総会収支は赤字となって学会事務局から相応の金額が補てんされたと聞いた。大会長を受けると赤字を真剣に心配しなければならない状態であったのである(昨年の総会は黒字となり、黒字分は大会校から学会に対し寄付がなされた)。会員数1万2~3000人の学会で総会にはその1/6しか参加しない学会であった。総会に参加したことの無い会員や、精

神保健指定医であり、他の精神医学関連の学会に参加することはあっても、精神神経学会員ではないという精神科医が少なからずいた。

昨年からの総会の準備を本格的に始めるようになって気づいたことであるが、本学会は他に比較できないほど大規模かつ多様であるということである。わが国には実にたくさんの精神科医が多彩な活動をしていて、エネルギーに満ちた組織であるということに気づかされた。この人たちすべてが精神神経学会に結集すると想像を超えるエネルギーとなるであろうと予想された。

2009年の神戸の大会では事前登録の数から4000~4500の会員の参加があると予測している。これは全会員の1/3に相当する。2~3年前の2倍の参加者となる。総会が急速に大規模化している。これにはもちろん学会専門医の資格更新のための学会参加も大きな理由であることは否めない。

この大規模化は会場探しを困難なものにするなどの問題が生じているが、私はもっと基本的なものが変化していると感じている。いままで我が国の精神科医の意思を確認するために七者懇という7つの団体が懇談会を持たなければならなかった。しかし、本来、本学会が職能団体として機能し、全精神科医の意思を反映する組織であれば、七者懇は不必要であったろう。本学会が全精神科医の結集の場に変化しつつあると感じている。本学会がやっとの思いで他の学会並みに専門医制度を持ったことで我が国の精神科医が結集する場をもつこととなったわけである。私が精神神経学会神戸大会を準備する過程で感じたことは、精神神経学会は七者懇に参加する一組織ではなく、七者懇を超える、我が国全精神科医が結集し、その意思を具現する組織になっていく予感であった。

精神神経学会が、七者懇の構成集団がすべからくかつ等しく結集し、組織横断的な団体に進化することを熱望するものである。